

復活の種類と時について

聖書中には幾つかの異なるグループの復活についての記述があります。
(ここではイエス・キリストの復活と、例外的な個々の人の復活については扱いません。)

まず最初に出て来るのはキリストの復活直後の記録です。グループ BC [Grp-BC] とします
「記念の墓が開け、眠りについていた聖なる者の体が数多く起こされ、(人々は、彼がよみがえらされた後に記念の墓の間から出て来て、聖都に入ったのである) 多くの人に見えるようになった。」
(マタイ 27:52 - 53)

別の復活グループは、啓示 20 書にある、「第一の復活」[Grp- 第一]、
そしてさらに別の、千年後の「残りの死人」の復活です。[Grp- 残り]
「イエスについて行なった証しのため、また神について語ったために斧で処刑された者たち、また、野獣もその像をも崇拜せず、額と手に印を受けなかった者たちの魂を見たのである。そして彼らは生き返り、キリストと共に千年のあいだ王として支配した。(残りの死人は千年が終わるまで生き返らなかった。)これは第一の復活である。第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。これらの者に対して第二の死は何の権威も持たず、彼らは神およびキリストの祭司となり、千年のあいだ彼と共に王として支配する。(啓示 20:4 - 6)

[Grp- 残り] についての具体的な記述はその少し後にあります。
「そしてわたしは、死んだ者たちが、大なる者も小なる者も、そのみ座の前に立っているのを見た。そして、数々の巻き物が開かれた。しかし、別の巻き物が開かれた。それは命の巻き物である。そして、死んだ者たちはそれらの巻き物に書かれている事柄により、その行ないにしたがって裁かれた。そして、海はその中の死者を出し、死とハデスもその中の死者を出し、彼らはそれぞれ自分の行ないにしたがって裁かれた。そして、死とハデスは火の湖に投げ込まれた。火の湖、これは第二の死を表わしている。また、だれでも、命の書に書かれていない者は、火の湖に投げ込まれた」(啓示 20:12 - 15)

そしてこれらは、次の聖句で述べられている復活と同じものです。
「義者と不義者との復活…」(使徒 24:15)
このことを驚き怪しんではなりません。記念の墓の中にいる者がみな、彼の声を聞いて出て来る時が来ようとしているのです。良いことを行なった者は命の復活へ、いとうべきことを習わしにした者は裁きの復活へと出て来るのです。」(ヨハネ 5:28 - 29)

この [Grp- 残り] は千年が終わった時点での復活であり、クリスチャンの関係した復活ではありません。

この三つのグループのほかに、「復活」とは表現されていませんが、明らかに「復活」についての記述と思われるものが2つあります。

ひとつは、十四万四千人の人々です。[Grp-144]

その根拠は彼らが、「地から買い取られた」「神と子羊に対する初穂として人類の中から買い取られた」という記述によります。

そしてもう一つは、啓示 12 章の「女」の産む「子、男子」です。[Grp- 子]

これが復活であるとする根拠は文脈から、この「子」は「兄弟たち」であり、彼らは「子羊の血のゆえに、また自分たちの証しの言葉のゆえに彼を征服し、死に面してさえ自分の魂を愛さなかった」(啓示 12:11) という記述によります。

(この「女」と「子」についての詳しい論説はファイル32 「啓示12章の[女]が[子]を産むとはどういう事ですか」をご覧ください。)

これで全部で五つのグループの復活が出て来ました。

実はもう一つ、「復活」のような記述があるのですが、これは比喩的な表現だと思われます。

それはダニエル12章に出て来る次の聖句です。

「塵の地に眠る者のうち目を覚ます者が多くいる。この者は定めなく続く命に、かの者は恥辱に、また定めなく続く憎悪に至る。」(ダニエル 12:2)

これは、終わりの日に「ミカエルが立ち上がり」「国民が生じて以来その時まで臨んだことのない苦難の時が必ず臨む」時に生じるとされています。ここの記述にある復活は異なった道に至る二種類のグループが同時に目を覚ます、とされています。

ミカエルが立ち上がるのは、啓示12章から分かるように、それは、サタンを放逐する行動です。それによって「地には災いが生じ」未曾有の苦難の時が臨みます。

この時点で、永遠の命と永遠の恥辱、憎悪に至る文字通りの復活が起きると言うことは、他の聖句との整合が取れません。

この記述は、この時、生来のユダヤ人の内、メシアを認めるようになる人々と、目が覚めたにも関わらず、依然かたくなで、最終的に裁かれる人々が生じることを描いているものと考えられます。この考えを示唆しているのは、続く3節です。

「洞察力のある者は大空の輝きのように照り輝く。多くの者を義に導いている者たちは定めのない時に至るまで、まさに永久に星のように輝く。」(ダニエル 12:3)

この「洞察力」のある者はオアンティオコス・エピファネスの時代と同じように、終末期の「荒廃をもたらす嫌悪すべき」が現れた時、目を覚ます人々の事でしょう。こう書かれています。

「また彼らは荒廃をもたらす嫌悪すべきものを必ず据える。「また、契約に対してよこしまな行動をしている者たちを、彼は滑らかな言葉で背教に導き入れる。しかし、自分たちの神を知っている民は、優勢になり、効果的に行動する。そして、民のうち洞察力のある者たちは、多くの者に理解を分かち」(ダニエル 11:31 - 33)

ダニエル書の最終部分にも同様の表現が見いだされます。

「多くの者が身を清め、白くし、練り清められる。そして、邪悪な者は必ず邪悪に振る舞い、邪悪な者は一人として理解しないであろう。しかし、洞察力のある者は理解する」(ダニエル 12:10)

いずれも、終末期に「洞察力のある者」の助けによって、メシアに関する「理解」を与えられて、悔い改めて神の恵みを得られる人と、「恥辱」つまり裁きに遭う人の篩い分けが行われるということのようです。

従って、この記述は、ここで復活の記述としては扱わないことにします。

さて、元にもどって、五つの復活グループですが、順に考慮しましょう。

まず [Grp-BC] ですが、出来事のタイミングから言っても、このグループは、キリスト前の、「是認された人々」でしょう。

「天から下った者、すなわち人の子のほかには、だれも天に上ったことはありません」(ヨハネ 3:13)

「実際ダビデは天に上りませんでした」(使徒 2:34)

イエスがメシアとしての働きを成し遂げるまでは、だれひとり天に上った者がいないなら、死ん

だ人々はどこに行っていたのでしょうか？

それは死者をとどめ、キリストの贖いの業と死者の復活を待つための場所です。

旧約ではヘブル語でそれを「シェオル」と呼び、新約ではそれを「ハデス」と言い表しています。いわゆる「記念の墓」のことです。

ユダヤ人の伝承によると、そこは「アブラハムのふところ」としても知られています。死のときに忠実なイスラエルは「その父祖たちの元に集められる」と言われていました。

イエスが、ルカ 16 章で述べられた、「富んだ人とラザロ」についてのたとえ話は、この伝承を念頭に置いて語られています。

[Grp-BC] は、キリストの贖いの恩恵として、キリストの復活後、直ちに天に復活したものと思われる。

その根拠として、先ず上げられるのは、ルカ 13 章の記述です。

「アブラハム、イサク、ヤコブ、およびすべての預言者が神の王国にいるのに自分が外に投げ出されているのを見るとき、そこであなた方は泣き悲しんだり歯ぎしりしたりするでしょう。さらに、人々が東のほうや西のほうから、また北や南から来て、神の王国で食卓について横になるでしょう。」(ルカ 13:28 - 29)

これは、天の王国に入る人々について、旧約の忠実な人々や預言者がいるところに、本来の「約束されていた」生来のユダヤ人ではなく、諸国の異邦人からなるクリスチャンが共になることについて語られた記述ですが、他の福音書の平行記述でも同様ですが、「アブラハム…預言者などが」すでに席についているところへ、他の人々が加わるというニュアンスで語られています。

さて、彼らは早々と天に入ったようですが、その後の聖書の記述にそうした言及はほとんどないように思えますが、黙示録の中に、恐らく [Grp-BC] の人々の事であろうと思える一つ興味深い記述を見つめました。

それは「二十四人の長老」です。

「み座の周りには二十四の座があり、それらの座には、二十四人の長老が、白い外衣をまとい、頭に黄金の冠を頂いて座っているのが見えた。そして、み座からは、稲妻と声と雷が出ている。また、火のともしび七つがみ座の前で燃えており、それらは神の七つの霊を表わしている。また、み座の前には、水晶に似たガラスのような海があるかのようである。」(啓示 4:4 - 6)

これらの人々が何者なのか、いつから天にいるのか何も書かれていませんが、黙示録の記述に突如出て来ますが、彼らは「初めから」天にいる者として描かれていますが、「み使い」とは別の存在なので、やはり、元々は地上の人間であったはずで。

この記述と関連があると思われるのが、モーセを通してイスラエルが神と契約を結ぶ時の記述である出エジプト記 24 章です。

「それからモーセとアロン、ナダブとアビフ、それにイスラエルの年長者のうちの七十人は上って行った。そうして彼らはイスラエルの神を見た。すると、その足の下には、サファイアの板石でこしらえたように、また清純さにおいては天そのもののように見えるものがあつた。」(出エジプト記 24:9 - 10)

イスラエル各部族の代表者である長老たちは、ここで、「水晶に似たガラスのような海」のようなものを見えています。

それで、[Grp-BC] の人々は、黙示録の二十四人の長老たちであり、すでにずっと以前から、天のいるものであろうと思われま

次に [Grp- 第一] の人々についてですが、このグループについては、幾つかの記述があり、中でも一番分かり易いものだと思いますが、冒頭に引用したとおり、キリスト以降の歴史上と、終末期に殉教したクリスチャンであることが分かります。

彼らは、キリストの臨在早々、「最後のラッパ」の際に復活するとされています。

そして残るのは、[Grp-144] と [Grp- 子] ですが、この [Grp- 子] である、象徴的な「女」の「子」と表現されている人々について簡単に述べておきますと、彼らはサタンが放逐される直前に「女」である「上なるエルサレム」から生まれ「神の元に」上げられます。

と言うより、彼らが天に復活した故に、「王国の権威が実現」したからこそ、サタンが投げ落とされることとなります。従って彼らは大患難を経験しません。このグループは誰でしょうか。

結論を出す前に、[Grp-144] を先に考えます。14万4千人も明らかに「地から買い取られ」た復活組であり、しかも「初穂」です。

彼らも、誰なのか、いつ復活したのか、明らかではありません。

ここで、さらにもう一つ、この両方の復活に関係のある記述で、とても不思議な表現があるので、ここで一緒に考慮します。

それは、聖書中でたった1箇所しか使われていない語句が用いられている次のパウロの言葉です。「キリストとその復活の力またその苦しみにあずかることを知り、彼のような死に服し、何とかして死人の中からの早い復活に達しえないものかと努めているのです。」(フィリピ 3:10 - 11)

パウロが復活【「早い復活」(新世界訳)】という言葉としてここで用いているギリシャ語は「エクサナスタシス」です。これは新約聖書ではここにだけ使われていることばですが、ギリシャ語：アナスタシスは、「起き上がらせること；立ち上がること」(「上へ」を意味するアナと「立つこと」を意味するスタシスからの語) という意味の言葉です。つまり それは、「アナスタシス」という語だけで「復活」という意味を持つ語句です。それに「外に」という接頭語の「エクス」がついています。字義的に「外に復活する」という意味であると説明されています。

ところが、フィリピ 3:11 の「復活」には、このエクスがついたアナスタシスの語の前にさらにもう一つ「エクス」がついているのです。

「τὴν ἐξανάστασιν τὴν ἐκ νεκρῶν」

(テーン エクサナスタシス テーン エク ネクローン) (下は英語の逐語訳)

of resurrection of out of dead (日本語の字義訳「…死の外の外の復活」)

Robertson's Word Pictures in the New Testament (ロバートソンの「新約聖書の絵画的描写」(1931年, 第4巻, 454ページ) では、「明らかにパウロはここで、信者が死者の中から復活することのみについて考慮し、それゆえにエクス[外]という語を2度用いているのであろう。パウロはこの語によって全人類の復活を否定しているのではなく、信者の復活を強調しているのである」とあります。

そして、「ものみの塔」ではこれは、「残りの死人」が復活する前の信者の復活だけを指している故に、啓示 20:5 の「第一の復活」であるとしています。

しかし、時間的にその後の、言わば「第二の復活」([Grp- 残り]) は、天の王国への復活ではない、「義者／不義者の復活」であり、クリスチャンに対する励ましとして、「復活」と言えば、その意味するものは当然、天的な「第一の復活」以外のものを指すことはありません。

「何とかして、その復活に達し得ないものかと務める」と敢えて言わねばならない特別なものではありません。

つまり、[Grp- 残り]はこの際論外であって、「第一の復活」こそクリスチャンの与る普通の復活であり、同時に彼らにとっての「最後」の復活の機会です。後はありません。従って、「第一の復活」とは別の「早い復活」「外の外の復活」があり、パウロはそれを、「なんとかして捉えようと、ひたすら身を伸ばしていた」ということです。

クリスチャンの復活が一種類「第一の復活」しかないのであれば、「なんとか」しようもなく、みな同じ時に同じ復活を経験することになるからです。

また、前に [Grp-BC] に関して引用した、ルカ 13 章の「王国の食卓に着いている人々」についての続く節は興味深いものがあります。

「そして、見よ、最後であったのに最初になる者がおり、また最初であったのに最後になる者がいるのです」。(ルカ 13:30)

ここから分かるのは天の王国に復活する人々は、全員一斉にはなく、時間差があり、しかも、「最後の者が最初に、最初の者が最後になるということがある」というのです。

このフレーズはマタイ 19 章の中にも見いだされます。

「イエスは彼らに言われた、「あなた方に真実に言いますが、再創造のさい、人の子が自分の栄光の座に座るときには、わたしに従ってきたあなた方自身も十二の座に座り、イスラエルの十二の部族を裁くでしょう。「しかし、多くの最初の者が最後に、最後の者が最初になるでしょう。」(マタイ 19:28 - 30)

この後、「天の王国は、自分のぶどう園に働き人を雇うため朝早く出かけた人ようだからです。…」という例え話を語られ、最後にもう一度、「このように、最後の者が最初に、最初の者が最後になるでしょう」と繰り返されています。そしてたとえ話では『働き人たちを呼んで、賃金を払いなさい。最後の者から始めて順に最初の者にまでゆきなさい』。とあって、精算つまり報いが与えられる順番は最後の者から始めて、最初の者までという順番であるとされています。

「多くの最初の者」つまり西暦一世紀以降のほとんどのクリスチャンは、「最後に」つまり「第一の復活」に与るでしょう。では、それらの人々よりも前に「最初に」復活する人々とは誰でしょうか。

恐らく、最後の最後に、ラストチャンスを与えられることになっている、(終末期にメシアを認めるようになる) ユダヤ人クリスチャンでしょう。これを [Grp-Last] と呼ぶことにします。

「女」である「上なるエルサレム」は、ここまできると、つまりアブラハムの胤である「子」を産み出すのに、それはそれは多くの苦難を経験しなければなりません。正に次の聖句の通りです。

「彼女は妊娠していた。そして、苦痛と子を産むもだえのために叫ぶ。」(啓示 12:2)

さて、ここで「早い復活」に与る人は誰かと言うことと、[Grp-Last][Grp-144][Grp- 子]との関連が謎のままだったので、ここでまとめて 最後に、この点を解決しましょう。

「最後の者から」[Grp-Last] が先に王国に入ることになっていることはすでにのべました。

ですから、[Grp-Last] が与るのは [Grp- 子]か [Grp-144] のどちらかしかありません。

本来、パウロを含む初期のユダヤ人クリスチャンは「最初の者」ですから、基本的にこの「先発組」にはなり得りえません。

しかし「早い復活」という変則的な取り決めによって「最初の者」でありながら「最初に」復活する人々がいるという事のようにです。

そして、その機会も [Grp- 子]か [Grp-144] のどちらかしかありません。

[Grp-子]の人々とは、「子羊の血のゆえに、また自分たちの証しの言葉のゆえに彼を征服し、死に面してさえ自分の魂を愛さなかった」(啓示 12:11) という表現からも分かるように、西暦一世紀から終末までの(キリスト時代の全歴史の)真のクリスチャン(上なるエルサレム)の中から、何らかの目的で選ばれた人々が「最初に」王国に入るといえることでしょう。

[Grp-144]については聖句はこう表現しています。

「わたしたちの神の奴隷たちの額に証印を押す」(啓示 7:3)

そうです、「証印を押される」人は「私たちの神の奴隷たち」です。すでに「神の奴隷」という立場にある人々に、ある何らかの目的で「証印」が押されます。

その特別な目的とは、一世紀当時、新しい契約によって発足したクリスチャン会衆の「初穂」であった十二使徒の働きに似た、「新しいエルサレム」の基礎をなす人々であると考えられます。(啓示 21:10-21)

(「14万4千人」については、ファイル『9 「14万4,000人」を改めて検証する』をご覧ください)

これらの、聖句の記述から導き出される結論はどのようなものでしょうか。

この結論を先に述べると [Grp-子] = [Grp-144] であるという事です。

つまり「女」の生む「子」と「14万4千人」とは同一の人々であるということです。

最後のこの結論の根拠と、それをパウロが何故「早い復活」として追い求めたのかとうことを説明したいと思います。

この結論の反論として出て来るであろうと思えるのが、次の論点です。

啓示 9:4 に「額に神の証印のない人々だけを損なうようにと告げられ」という描写が出てきますが、もしこれが、「14万4千人」を指しているなら、この時点でまだ選び終わっていないということになりますが、「神の証印」を得ているという表現自体は、随所に見られ、例えば、エフェソス 1:13 には「約束の聖霊をもって証印を押され」と述べられているように「神の証印」が押されているのは、全てのクリスチャンに対する証であるということですし、第5のラッパの災いである「死にたいと思う程の苦痛をもたらす五ヶ月間」を免れるのが、14万4千人だけで、他のクリスチャン、例えば、「大群衆」には許されたと考えるのは、他の聖句と調和が取れないので、第5のラッパに出て来る、「神の証印」のある人は、14万4千人を含まない可能性もあり、この前の時点で、選びは終わっている可能性もあると思います。

さて最後にフィリピ 3:11 の「早い復活」についてですが、まず、パウロの復活観というか、「復活」についてどのような感覚を抱いていたのかということですが、明確には分かりませんが、次のパウロの言葉から、それがある程度伺えるかと思えます。

「固い食物は、円熟した人々、すなわち、使うことによって自分の知覚力を訓練し、正しいことも悪いことも見分けられるようになった人々のものです。このようなわけで、キリストに関する初歩の教理を離れたわたしたちは、死んだ業からの悔い改め、また神に対する信仰、さまざまなバプテスマについての教えや手を置くこと、死人の復活や永遠の裁きなどの土台を再び据えるのではなく、円熟に向かって進んでゆきましょう。」(ヘブライ 5:14 - 6:2)

ここでパウロは「死人の復活」を「初歩的な教理」と呼んでいます。いわゆる「キリスト教」の基本中の基本のひとつです。

しかしそれだけに留まっているのではなく「円熟に向かって進む」よう励ましています。

この「円熟」が一つのキーワードです。「早い復活」について述べた時、脳裏にこのキーワードがあっ

たようです。

少し長い引用になりますが、この聖句の前後を読んで見たいと思います。

「わたしの主キリスト・イエスに関する知識の優れた価値のゆえに、一切のことを損とさえ考えています。キリストのゆえにわたしはすべてのものを損失しましたが、それらを多くのくずのように考えています。それは、自分がキリストをかり得て彼と結ばれた者とみなされるためです。…こうして、キリストとその復活の力またその苦しみにあずかることを知り、彼のような死に服し、何とかして死人の中からの早い復活に達しえないものかと努めているのです。…

それについては一つのことがあるのみです。すなわち、後ろのものを忘れ、前のものに向かって身を伸ばし、キリスト・イエスによる神からの賞である上への召しのため、目標に向かってひたすら走っているのです。それで、わたしたちのうち円熟した者は皆、このような精神態度を抱きましよう。そして、もしあなた方が何かの点でこれと異なる考え方をしているとしても、神はここに述べた態度をあなた方に啓示してくださるでしょう。いずれにしても、自分がどこまで進歩したかに応じ、その同じ仕方で整然と歩んでゆきましよう。」(フィリピ 3:8 - 16)

パウロはこれらの言葉を「わたしたち円熟した者」に対して語っています。従って、ここで言及している「ひたすら身を伸ばして捉えようと努めている」「早い復活」とは「初歩的な教理」である、いわゆる「死人の復活」「クリスチャン皆が最後にあずかる「第一の復活」とは明らかに別のものを念頭に置いていたと考えられます。

「もしあなた方が何かの点でこれと異なる考え方をしているとしても、神はここに述べた態度をあなた方に啓示してくださるでしょう。」

まだ「円熟」していないクリスチャンたちには「初歩的な復活の概念」しかもたない人々もいたかも知れませんが、いずれ円熟して、ここに述べられた態度を神が啓示して下さるに違いないと確信していました。

生きているうちに「どうにか」すれば捉えられる可能性のある「復活」とは、円熟した者にのみ与えられる特別な、よりキリストの死と復活の意義に近い立場の復活のようです。

それは「他の人よりも高い立場」というようなものではなく、「キリストに関する知識の優れた価値」観から生ずる、少しでもキリストに近い、人々に対する愛と優れた働きを自分も同じように示すものでありたいという渴望のことでしょう。

生きている間にどれほどクリスチャンとして真の円熟を目指せるか、それが、「キリストの奴隷」となった人々の内、「新しいエルサレム」で人々の祝福の源となるアブラハムの胤の中でも、その特別な割り当て、もしくは基礎的な役割を果たすものとして仕えることを実現させる。

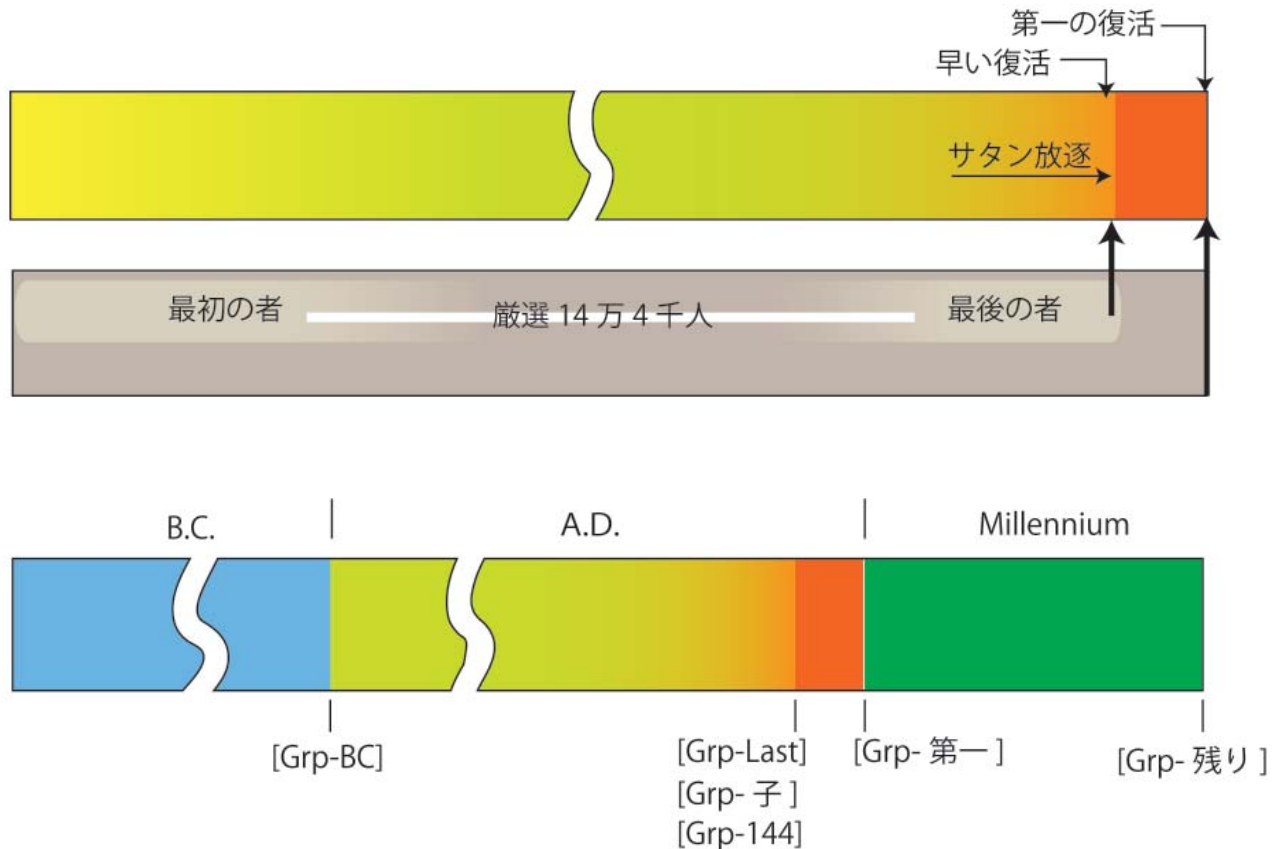
つまり、その特別な割り当ては、神とキリストのような利他的な思いを人一倍持つクリスチャンにとっては、もっとも望ましい立場と言えるものなのでしょう。

それで、「なんとかして早い復活に達し得ない者かと務めた」人々こそ、次の聖句にあずかることのできる人々の事なのでしょう。

「見よ、子羊がシオンの山に立っており、彼と共に、十四万四千人の者が、彼の名と彼の父の名をその額に書かれて立っていた。…そして彼らは、み座の前および四つの生き物と長老たちの前で、新しい歌であるかのような[歌]を歌っている。地から買い取られた十四万四千人の者でなければ、だれもその歌を学び取ることができなかつた。…これらは、子羊の行くところにはどこへでも従って行く者たちである。これらは、神と子羊に対する初穂として人類の中から買い取られたのであり、その口に偽りは見いだされなかつた。彼らはきずのない者たちである。」(啓示 14:1 - 5)

終末期の洞察力を示す [Grp-Last] の人々も同様の精神態度を示した者として、彼らと一緒に「最初の」復活に与る者と考えられます。

それで、「多くの最初のもの」である、ほとんどのクリスチャンが気づかぬ「第一の復活」の前に、つまり「最初に」、終末期の「上なるエルサレム」から生まれる「子」[Grp-子]とは、「最後」である終末期にメシアを認めた「洞察力を働かせて」人々に「理解をもたらす」「目覚めた人々」である生来のイスラエル人 [Grp-Last] と、「最初のもの」のうち(恐らく12使徒を含む)円熟した人々を、例外的に含む人々からなる「神の奴隷たち」に「新しいエルサレム」の基礎を構成するという特別の目的のために「神の証印を」押された「14万4千人」の人数で成る人々の事だと考えられます。



この理解をもって、啓示 14 章を読むなら、全てが時系列的に納得のゆくものとなります。啓示の書は、章の順序と出来事の順番がすべて、順を追って書かれているわけではなく、ある章は、すでに述べた事の、あるいはこれから起きることの詳述として書かれています。しかし、全てを注意深く調べて見ると、啓示 14 章は、出来事の順番を順序通り記述していると見ることができます。

14 章には合計 7 人のみ使いが登場しますが、その順序は、最初に、天の描写として、子羊と 14 万 4 千人がすでに「シオン」にたっており、それから、患難期の証の業、大バビロンの終焉、獣を崇拜する者の結末の警告、キリストの臨在、キリストによる地の収穫（選ばれた者たちを集める業）、大バビロンの滅びの順で描かれています。

それで、終末期の（70週の）最後の1週の初めの時点（サタンが放逐された）で、すでに天に「14万4千人」が天に見られることが分かります。

（終盤のこれらの詳しい聖書的根拠については、ファイル 10,23,29,32などを参照して下さい）